

あったようにおぼえています。

やがて水平線上に僚船がみえ、救助にやってきましたが波が高くて救助しにくくなん時間も待っていました。味方の爆雷投下の振動で腹痛がおこり寒さも加わってあと三十分もたないような感じがしました。

午前十時ごろ、六時間ぶりにようやく救助されました。午後には浮いている死体は一人残らず引き揚げられました。夜にはいって花連港に入港し、死者は翌日火葬にふされ、通夜をしました。

昨日のあの元気だった友が今日はと思うと本当に情けなく、家族のことを思い浮かべました。戦争の苛酷なことと従軍したいくたの人々の労苦は、絶対に忘れてはならないと思います。

硫黄島戦記

愛知県 宮下 孝雄

特別輸送艦一五七号艦(艦長佐藤大尉、砲術長林大尉)

は、硫黄島上陸作戦・輸送作戦実に七回目にして米機動部隊を発見(昭和十九年十二月十七日午後五時頃)、艦内放送と同時に対空戦闘のラッパがなりました。

硫黄島摺鉢山方向からB29の大編隊が本艦左四五度くらいに来た時、高角砲に「撃ち方始め」の号令がかかり発射しました。高度は約一万メートル、そのため二五ミリ銃は配置についても号令がないため撃つことは出来ません。艦の左右に爆弾の投下で白波が驚くほどでした。

そのB29が去ると同時に艦砲射撃が始まり、米駆逐艦が全速力で南海岸に向けて魚雷を三本発射、同時に水上砲を撃ち始めました。対戦まもなく本艦後部に爆雷が命中、後部は大破、戦死者、負傷者が多数出ました。また高角砲のせん回が出来なくなり、後部群の三連装の機銃で対戦するが、艦の速力も低下し浸水はなはだしく、南海岸沖三百メートルまで近づいた時、こんどはP38ロッキードとグラマンの戦闘機が海面すれすれに来て四方から機銃掃射、これに対し海防艦、駆逐艦の機銃群が応戦、とくにP38ロッキード機は最後まで対戦して去りました。には実に驚きました。

そのかん何分もしないうち、本艦は航行不能になり、米艦隊の砲撃中、艦長より総員退艦命令が出ました。軍艦旗おろしかたのラッパとともに、私が従兵長をしていた関係から最後に艦長が艦よりはなれると一緒に艦長が所持していた日本刀の名刀ふた振りのなかのひと振りを持ち、泳ぎました。

海岸の砂浜に足をとられ、なかなか島の防空壕に思うように進むことが出来ないでいるうち、また、P38が来て、海と陸を無差別に掃射し、自傷者もずいぶんでしたが、どうにか一番近い防空壕にはいりこむことができました。なかは戦死者と負傷者がいっぱいでした。私たちのはいった防空壕は壕のうえより八メートルで、常時島の南海岸に面した場所では一番よいが、二百五十キロ爆弾の直撃を受ければだめだと、下士官、兵はいました。なかの両側は土のうでつくられており土がさくさくねばりがないようでした。

艦の兵隊は体一つで何の武器もなく、ただ、島の陸海軍にしたがつているしかありませんでした。相かわらず艦砲射撃はつづくが、島の味方は一発も反撃しません。

私達乗組員がなんで砲撃しないのかと壕のなかで話すと、撃つとその基地を集中して米軍が撃ってくるので最後の上陸の時までは反撃しないと、島の兵隊は誰も同じにいった言葉が今も忘れません。

真夜中ごろと思いましたが、艦砲の音がなくなった時、敵は上陸にはいつているのではないかと壕のなかで話していました。内地には帰ることはできない、乗組員はもうこの硫黄島で死ぬのかと、胸のなかがなんともいえぬ思いでした。それが時間が過ぎても上陸の報告もなにもない、そのうち米機動部隊は去って行ったことが司令部から発表されて一安心したことを今でも忘れません。

長い夜も明るくなり、朝食に乾パンを食べ、飛行場及び道路等の砲撃の後の整地のため、艦の働ける兵隊は作業員として協力することになりました。昨晩米機動部隊の撃った砲弾が数百発以上不発弾と発表されたその処理に大部分の兵隊が参加しました。処理中突然爆発して、相当の戦死・負傷者がでて驚きました。まもなく司令部からの発表で艦砲の撃った砲弾は、時限爆弾と発表され

ました。全部同一時間のため、大勢の死傷者が出てしまいました。

兵隊の死者の調べが各班なかなか出来ないほどでした。夏の軍服等の小さくちぎれた布切れ等しか残らず、体はバラバラで確認するのは相当に時間がかかりました。

そのうち千葉の館山航空隊から双発の天山、月光の戦闘機がひらいして、飛行場へどうにか着きました。この機はサイパン島へ爆撃に行くためたびたびくるのだと島の兵隊から聞きました。なにしろ日本の双発機は硫黄島で燃料補給しないとサイパンまで行くことは出来なかつたのです。日本本土の空襲は皆サイパン基地からB29が来たので、日本では再度サイパンを取りもどさないと、勝つことは出来ないのです、どうしても硫黄島が一番貴重な基地の島であったことはいまでもありませんでした。

私達乗務員は約二週間近く島の陸戦隊に協力しました。昭和十九年十二月三十日やはん特別輸送艦が南海岸に着き戦車等陸揚艦の乗組員残務兵はこの第百三十四号

艦に乗り、硫黄島をあとにして二十年一月四日横須賀港に入港しました。

軍用列車で呉へ行き第一兵舎にはいり、同年一月二十五日駆逐艦「春月」乗船を命ぜられ、佐世保軍港で七人の兵隊が乗艦しました。今思えば硫黄島の陸海軍の当時の兵隊は本当に、話より大変な島を守ったものです。水は少々茶色の水、また野生の植物はほとんどなく、ただ岩石の摺鉢山があるだけで、あんな小さな島で玉砕までよく戦ったことが、今も頭よりはなれません。

栗林中将・西大尉など多くの名将・兵が静かに眠っていることを思うと心から御冥福をお祈りせずにはいられません。

なんとか島に行ける機会があったら、生きて帰った戦友と、あの戦いの硫黄島を一度おとすれたいとおもいます。